

三卷本『色葉字類抄』疊字部の性格と訓読の語について

藤本 灯

一、目的

院政期に成立したとされる辞書、三卷本『色葉字類抄』には約一三三一二語が収められており（*1）、当時の理解語彙や使用語彙の一端を窺うことができる。『色葉字類抄』の内部は語の意味や体裁によって大きく二部に分類されているが、そのうち最大の語数（約五〇一六語、全体の約四割に当たる）を有するのが、二二部の一五番目に位置する疊字部である。

疊字部は、一三番目の辞字部、一四番目の重点部とともに、語の意味ではなく外形によって分類された数少ない部であり、二字以上の漢字から構成される熟語によって成り立っている。疊字部の内部は大きく音読語と訓読語に区別され、部の前半に音読語、後半に訓読語が配置されるのが普通であるが、数の上では音読語が圧倒しており、疊字部

の約九割（約四五一二語）（*2）を占めている。

疊字部音読語に関してはその組織や排列を山田孝雄氏（『色葉字類抄攻略』/西東書房1928）、峰岸明氏（*1）らが明らかにされてきた一方で、語の意味用法や性質については多く未解明のままである。反対に、疊字部訓読語に関しては、一部の異質な性質（文選読みなど）について山田俊雄氏に御論稿が有るが（*3）、全体の体裁について詳細に示されたものは、未だ無いようである。

そこで本稿では、疊字部訓読語の掲出形式、すなわち利用者に向けて訓読語彙がどのように示されているかを客観的に分析することで『色葉字類抄』の基礎研究に供し、今後の『色葉字類抄』研究の課題を考える機会としたい。主に次の三項目について調査し、その対象とする訓読語は前田家本に現存する部分とする。

・訓読語の語数、熟語の構成字数、声点や注文の有無など、主に語の外形に関する情報

・異本との比較→二巻本『色葉字類抄』、二巻本『世俗字類抄』との重複語、各本の特有語について

・訓読語の、三巻本『色葉字類抄』内における重複掲出について

二、訓読の語の概観―体裁の面より

【表1】前田家本『色葉字類抄』疊字部中の訓読語数

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
区切りの星点	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
篇	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	チ	リ	ヌ	ル	ヲ
見出し語数	57	58	19	19	11	11	21	21	0	0	0	0
(二字熟語)	-	-	-	-	-	-	-	-	12	12	5	5
(三字熟語)	1	-	-	-	-	-	-	-	3	3	0	0
(四字熟語)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
声点付(一字)	1	1	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-
声点付(二字)	-	-	-	-	-	3	1	-	-	-	-	-
声点付(仮名)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
音読付(一字)	1	1	-	-	2	2	-	-	-	-	-	-
音読付(二字)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
注記付	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
注文ナシ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
計	364	356	5	5	8	3	3	5	13	13	3	3

まず、疊字部訓読語の語数を【表1】に示し、表上部の番号に従って解説を行う。表の欄内が空白の場合は、該当の項目が無いことを表し、「-」は、該当の篇にそもそも訓読語が存在しないことを表す。

〔1〕訓読語は疊字部の後半に位置するため、最初の訓読語の前には音読語との区切を示す朱の星点があるのが普通であるが、ニワヨの三篇ではこの星点脱落している。しかし、後代に補入された語や長疊字(三字以上の熟語)排列のゆれ(次項参照)を除けば、概ね「疊字部の前半が音読語、後半が訓読語」という形式を保っている。

〔2・3〕前田家本『色葉字類抄』疊字部中の訓読語は、計三六四語である。これは、前田家本の存する上巻イヨ篇および下巻ユキ、シウス篇の疊字部のうち、訓読語が掲載されていないロヘリルエ篇を除く二二篇の語の総数であり、以下の数値は、すべて二二篇中のものとする。(中巻所収の語およびユミ篇の語については調査の対象とせず、黒川家本を参照するに止める)。また、次の○語は三六四語内で別訓を持つものであり、見出し語の漢字文字列の異なり語数は三五四語と

なる。これらの重複掲載語には、訓読をする際にどちらの訓み方に従えばよいのかということを示す注記等は無い。

沛艾 イサム・(アクナフ)

徒歩 ハタシ・カチアルキ

卒尔 ニハカナリ・アカラサマ

發越 ニホフ・カラル

勦読 トリコト・サカシラ

只且 カクハカリ・シハラク

固護 カタオモフキ・ヒタヲモフキ

卓犖 コエスクル・スクレタリ

周章 アハツ・サハク

無端 アチキナシ・ス、ロニ

また、訓読語は漢字熟語に当てた和訓の頭音によってイ、スの各篇に排列されているため、基準となる頭音は和訓の一部であると予想されるところであるが、音読み＋訓読みから成る句の「王事靡盬(ワウシモロイコトナシ)」「請降(カウコウ)」「やいわゆる重箱読みの「際目(サイメ)」の三語は、それぞれワ、カ、サの各篇の訓読語グループに配置されている。ただし、「无所詮(シヨセンナシ)」「乳錦莖虎(ジウコハトラ)」「ラクフ」「取地尾(スサビ)」等は音読部に位置するなど、振り分けの基準は必ずしも判然としない。今回の調査では、字類抄中の分類に従い、前三者も訓読語に数えた。ただし「任意」「ジミ」は音読語とし、表に計上しなかった。

[4~6] 疊字部には漢字二字以上から成る熟語が収められているが、訓読語三六四語の内訳は、一字熟語が三五六語、三字熟語が五語、四字熟語が三語であり、音読語と同様に、二字熟語がその大半を占めている。

[7~11] 疊字部音読語には漢字に声点が付されているものが多いが、訓読語のうち漢字二字ともに声点が付されたものは五〇語、一字のみに付されたものは八語であり、訓を示す片仮名に付されたものは一五語である。これに関連して、訓読語として掲げられた二字熟語のうちその字音をも片仮名で示したものは、漢字二字とも示したものが三八語、一字のみ示したものが三語ある。本篇収録の「鬢鬚」の下字の右傍に別筆で「タイ」とあるものは無視した。声点と字音表示の対応は必ずしも規則的ではない(包含関係にないが、声点付の熟語五八語と音読付の熟語四一語のうち重複しているものが三五語であるため、音読付の熟語は差声されている傾向があると言えらる。)。疊字部音読語との関係については後述する。

[12・13] 疊字部音読語は基本的に部・分(人倫部や美女分など)により意義分類されているが、訓読語はこの意義分類下になく、したがって大半の語の注文中には部・分の表示が無い。漢字に対応する訓(仮名)以外に意味分類・字体・用法等に関

する注記を持つ訓読語は三一語であり、全体の約八・五%に止まる。また、注記の中心となる片仮名訓も含め、注記が一切無い見出し語のものも、三語存在する。

三、訓読の語の概観―異本との比較より

次に、『二巻本』色葉字類抄』以下『二色葉』、*4および二巻本『世俗字類抄』以下『二世俗』、*5と比較することによって、『三巻本』色葉字類抄』以下『三色葉』に収録された疊字部訓読語の特徴を考えたい。これら三本の比較に当たっては、単純に疊字部同士の比較とし、増補改編時に他部より移入した語や他部に転じた語、他部注記から見出し語に昇格した語については

考慮に入れない(*6)。また、前田家本に欠ける篇については省略し、『三巻本』で訓読語を持たない口レリルエ篇については他二本でも訓読語掲出が無いため、実質的には二二篇で比較を行った。

【表2】二色葉・二世俗との重複語数、各本特有語数

18	17	16	15	14	3	2	
三色葉特有語	二世俗特有語	二世俗との重複	二色葉特有語	二色葉との重複	見出し語数	イロハニホヘトチリヌルヲワカヨコエテアサキシエヒモセス計	
1	6	27	6	56	58	イロ	
-	-	-	-	-	0	ハ	
2	-	7	1	16	19	ニ	
1	1	6	10	11	11	ホ	
2	1	4	2	19	21	ヘ	
-	-	-	-	-	0	ト	
4	-	2	1	8	12	チ	
2	-	1	2	3	5	リ	
-	-	-	-	-	0	ヌ	
-	-	2	3	3	3	ル	
-	-	-	-	-	0	ヲ	
2	6	2	5	7	7	ワ	
2	-	2	9	11	11	カ	
5	2	13	3	33	38	ヨ	
1	-	8	13	14	14	コ	
2	-	14	1	26	28	エ	
-	-	1	1	1	1	テ	
2	-	4	6	8	8	ア	
1	1	18	42	43	43	サ	
-	2	12	1	25	25	キシ	
-	-	2	5	5	5	エ	
1	7	7	20	21	21	ヒ	
-	-	-	-	0	0	モ	
-	-	3	1	16	16	セ	
-	-	3	1	3	3	ス	
-	-	0	2	2	2	計	
3	-	2	1	10	13		
31	26	140	20	331	364		

くないが(多くは二色葉の誤脱字のため)、今回の調査ではそのような厳密な視点は不要と判断したためである。また、二色葉カ篇に「徒跣」「徒歩」の二語として掲出されていた語が、三色葉では一

語にまとめられ「徒跣 カチアルキ 又下字歩」とされた一例については、「徒歩」を二色葉特有語と数えた(14)(15)の和を二色葉の語数とするため。

なお、二色葉と三色葉の訓読語の排列については、*1の峰岸明氏による巻末解説(一四頁)に詳しい。峰岸氏によれば、疊字部の音読語が二色葉から三色葉に至るまでに大幅な改訂が加えられたのに対し、訓読語は「この書の原態を保存する結果となつている」ようである。

〔16・17〕二世俗疊字部所収の訓読語との比較：三色葉ヨ篇の見出し語「終宵」「通夜」「佳辰」「今月」は、二世俗では「終宵^同」「佳辰^{合調}」と統合されているが、四語とも重複語とした。また三色葉と篇「長成」と二世俗「成長」は訓「ヒト、ナル」が一致しているため重複語とした。

二世俗は、疊字部中の語を音読語↓訓読語の順に排列するという『色葉字類抄』系の方針が未整備であったため、音訓混合の状態で収録されている。更に、大半の熟語の読みが示されないことから、頭音が同じ所属の場合に音読語・訓読語の区別が付かない場合がある(「儂譏言」「ザンゲン<サカシラ>等)。よつて、右表の〔16〕は〔14〕と同様に漢字文字列の重複を以て語を同定し、〔17〕については明らかに訓読語と認められる語以外は表に計上しなかつた。

〔18〕三色葉に収録されながら、他の二本ともに無い項目数を表す。なお、二色葉に無く二世俗に在る項目はイ篇・ハ篇の各一語「引唱」「切齒」のみであるから、他篇の〔18〕の数字は〔3〕と〔14〕の差と同値である。

字類抄の系統関係については今なお不明な部分が多い。三巻本より古態を持つ二巻本系統独自の収録語であっても、三巻本編纂後に補入されたものとなれば、〔15〕〔17〕の語を以てすべし。また三巻本編纂時に削減されたものと断じ、三巻本の特徴に結び付けることはできない。しかし、〔18〕の如く三巻本で独自に採録したと考えられる訓読語については、やはり確認しておく必要があるだろう。「三色葉特有語」は以下の三一語である。

幾何(イクハク)

𦉳𦉳(シタナシ)

𦉳𦉳(ハチラクヨム、恥辱分)

早卒(ハカナリ)

風聞(ホノギ)

放縦(ホシキマ)

左右(トサマカウサマ)

常夏(トコナツ)

等閑(トオサカル)

弁備(トノフ)

誓事(チカコト)言イ本) 困
 旺弱(チカラナシ) 困
 被及給哉(ヨホシタマレナムヤ)乞詞) 困
 自然(ノツカラ) 困
 瘴雲(ワサワヒ) 困
 可被分給(ワカチタマルヘシ)乞詞) 困
 彼此(カレコレ) 困
 辺哉(カタハラクルシキカナ) 困
 廡哉(カナシキカナヤ) 困
 如此(カクノコトシ) 困
 方違(カタ、カヘ) 困
 无由(ヨシナシ) 困
 歌哉(コ、ロヨイカナヤ) 困
 惟谷(コレキハマル) 困
 不相(テウタウセズ) 困
 手繼(テツキ) 困
 白馬(アオウマ) 困
 凌轢(シヘタク) 困
 怠荒(ササヒ) 困
 断絶(スクレタリ) 困
 諸捨(ステメヤ)云不令捨之義也) 困

右の一覧を見ると、「幾何(イクハク)」「早卒(ニハカナリ)」「瘴雲

(ワサワヒ)の如く同訓異字の熟語に引かれて加えられたものがある一方で、「被及給哉」「可被分給」「辺哉」「廡哉」「歌哉」「諸捨」等、ある種の文章を記すために新しく設けられた句類が存在することが分かる。「〜哉」の句については、前田家本の欠ける中巻ツ篇(二八九)にも「私哉(ツレナイカナヤ)」「懇哉(ツレナイカナヤ)」「蚤哉(ツライカナヤ)」の三語があり、右の四語と合わせた全七語については二色葉・二世俗に一切収録されていないことからも、「〜哉」のような句が三巻本において意図的に加えられたものであると考えることができる(*8)。

また、各篇の末尾周辺に配置されたものには語の上に「困」を付して示したが、同訓異字を持つ語とカ篇の熟語を除けば殆どの語が各篇末尾に固まって位置している。これは、これらの三巻本特有語が、一巻本から三巻本に至るまでに大量の疊字部音読語とともに新たに増補された語彙群であり、三巻本の特徴の一端を成していることを示している。

次頁の「表3」によれば、三巻本『色葉字類抄』全一三三二二語のうち、約三八%が疊字部に収録されており、さらに疊字部の約九〇%が漢語(字音語を含む語)であるということである(三二)色葉の数字は三宅氏が峰岸明氏の調査結果(*1)を引用したものである。峰岸氏は「漢語として算出したもの」に「疊字部の訓読語は加えていない」、また「一語に二種類以上の漢字表記が存する場合、それらの用字数は、当然のことながら、語数に算入して

【参考】三宅ちぐさ氏の調査（*9）より引用

【表3】三色葉と二世俗の語数比較

比率	疊字部漢語数	疊字部総語数	総語数	
90.1	4521	5016	13312	三色葉
84.1	1574	1872	8766	二世俗

【表4】疊字部中の訓読語数

重複比率	三色葉と一致する訓読語数	
100	676	三色葉
82.7	559	二色葉
38.5*	268	二世俗

*559/676=0.8269…、268/676=0.3964…。後者は誤りか。

いない」とされて
いることから、
差数の四九五
語は訓読語の訓
に着目した異な
り語数というこ
とになるだろ
う。同様に、三
宅氏の調査によ
ると二世俗の訓
読語の異なり語
数は二九八語
となる。

【表4】では延
べ語数を扱って

いるものと考えられるため、直接【表3】との比較はできないが、
【表2】の結果も併せて考えれば、二世俗は、三色葉との重複語
が二色葉と三色葉の重複語の半数以下であるにも関わらず、そ
の特有語が二色葉よりも多いということになる。これは、『色葉』
系と『世俗』系との内容上の隔たりを表しているが、一方で、三
色葉の疊字部訓読語は二色葉から継承した部分が多く、三色
葉独自の特徴を考えるに当たっては少数の三色葉特有語から推
察せざるを得ないということが明らかとなった。

ただし、訓読語の延べ語数が最も多く、語の取捨選択を行った
上でより体裁も整備された三巻本『色葉字類抄』掲載の語を考
えることは、なお有意義であると考えられる。（*10）

四、訓読の語の概観―字類抄内での重複掲出より

疊字部訓読語の中に声点の付された五八語の在ることは前述
の通りであるが、そのうち特に熟語を構成している漢字すべて（二
字ともに差声されている場合は、当該熟語が音読語としても存
在していること）を示唆している。

山田俊雄氏（*3・第二論文）は、疊字部訓読語が疊字部音読
語として再出するものを示しておられるが、それによれば訓読
語六八二語のうち一八〇語以上が音読語としても掲出されて
いる。また山田氏（*3・第一論文）は、疊字部音読語には音訓併
存の語イ篇音読部で「以^{サキツカ}往イワウ」とあるようなものが四九
五語あるが、そのうちそのままの語形で疊字部訓読語として再
出する七一語に文選読みと重なる部分も多いことから、「この字
類抄が、如何に組織、体例の上で画期的なものであっても、その
内容においてなお古いものを多く承けついでいることは否定し去
ることが出来ない」とされたのである。

しかし、音訓併合の形で示された場合に限らず、同じ語句が
二箇所以上に違う語形で掲出されていることについては、なお再

考の余地があるように思われる。そこで、これらの重複掲出を論じる手がかりとして、次の調査を行った。

	回数	内容	所属部(順同)	語数
				〔表5〕重複掲出回数と内容
[a]	2	他に一例音読語が在る例	量字部	91
[b]	2	他に一例訓読語が在る例	量字部	18
[c]	2	他に一例訓読語が在る例	天象部	1
[d]	2	他に一例訓読語が在る例	人事部	3
[e]	3	他に二例音読語が在る例	量字部・量字部	3
[f]	3	他に一例の音読語と一例の訓読語が在る例	量字部・量字部	13
[g]	3	他に一例の音読語と一例の訓読語が在る例	量字部・天象部	1
[h]	3	他に一例の音読語と一例の訓読語が在る例	量字部・動物部	1
[i]	3	他に一例の音読語と一例の訓読語が在る例	量字部・人倫部	2
[j]	3	他に一例の音読語と一例の訓読語が在る例	重点部・量字部	1
[k]	4	他に一例の音読語と二例の訓読語が在る例	量字部・天象部・天象部	1
[l]	4	他に一例の音読語と二例の訓読語が在る例	量字部・量字部・量字部	4
			計	139

量字部訓読語三六四語が、それぞれ字類抄の量字部や他部で音読語や訓読語として別に立項されている例を探し(＊11)、(文字列としての)出現回数・内容により分類して〔表5〕に示した。調査対象範囲は前田家本の欠ける部分も含め、「回数」の項目では、三巻本『色葉字類抄』中に同じ熟語が見出し語として出現する回数を示した(＊12)。

表から、三六四語の約三八%にあたる一三九語が何らかの語形で別の箇所にも現れていることが分かった(同じ語形で別の意義分類がなされた例も在る)。また、当該訓読語の他に音読語を持つものは**【b】【c】【d】**を除いた一一七語、同様に別の訓読語を持つものは四五語、音読語と別の訓読語両方を持つものは二三語(いずれも延べ熟語数)である。具体的には次のような例がある。

- ① 卒尔 ニカナリ (三篇量字部・上四〇ウ)
- 卒尔 ニカニソツシ (一〇篇量字部・中一九オ)
- 卒尔 アカラサマ (一篇量字部・下三九ウ)
- 卒尔 ユクリナシ (二篇量字部・下五六ウ)
- ② 以往 イニシ (一篇天象部・上二オ)
- 以往 サキツカタイワウ (一篇量字部・上二二ウ)
- 以往 アナタ (一篇量字部・下二四ウ)
- 以往 サキツカタ (一篇量字部・下五三ウ)
- ③ 面現 ヒタラモテ (七篇人事部・下九三ウ)
- 面現 ヒタラモテ (七篇量字部・下九九オ)

①の例のような場合、実際の文章中での訓み方を特定し難いため、文字列調査以上の用例調査を行うには困難が予想される。また、字類抄の中で、何故このように複数の音訓を以て熟語を掲出する必要があったのかという疑問も生ずる。

この他にも、他の語(主に一字で用言を表す辞字部の語)の注記に熟語が現れることや、訓読語注記に辞字部の字が示されることがある。後者は単純に意味注記とも考えられるが、見出し語と注記の影響関係(掲出の先後関係)については、別に調査が必要である。

例 切齒(ハクヒシハル) ↓切クヒシハル ↓齒也

威儀(カシツク) ↓威(キ) ↓儀(於非反)

任意(ジミ) ↓任(マカス) ↓意

大索(アサリ)アサル 搜也 ↓搜(アサル)

孟浪(アラシ) 麤也 ↓麤(アラシ)

五、今後の課題

以上の各調査からは、疊字部訓読語に関する個々の数値のみならず、三卷本『色葉字類抄』の編纂態度、また字類抄という辞書の進化過程の片鱗を示し得たように思う。字

類抄が先行の辞書を下敷きとしつつも、新たな利用目的に合わせた構成・組織を模索していたものと理解できる。

また疊字部がいわゆる「物の名」を類聚した部ではないことから、ここに収録された語の体裁や用法を明らかにすることは、『色葉字類抄』系統の辞書の性質を知る上で、欠かせない作業であると言えるだろう。字類抄の諸本や他辞書との影響関係についての調査も並行して進められるべきであるが、各語がなぜ本書に収録されたのかを考えるために、三卷本『色葉字類抄』の特有語に焦点を当てることも必要である。

本稿では、辞書の基礎調査の一環として疊字部訓読語を取り上げたが、疊字部音読語はもとより、他部の語についても、意味用法や辞書内での位置付けの定かで無いものが未だに多く残されている。今後、先行研究の示唆された諸々の可能性を検証する為にも、地道な調査が続けられるべきである。

なお、今回調査対象とした疊字部訓読語の語句一覧と意味用法に関しては、別稿に記す予定である。

〔注〕

1 中田祝夫・峰岸明編『色葉字類抄研究並びに総合索引』黒川本・

影印篇』(風間書房1977) 所収解説文(九四頁)参照。

2 同右、九九頁。

3 「色葉字類抄疊字門の訓読の語の性質―古辞書研究の意義にふれて―」(『成城文芸』3/1955)・「色葉字類抄疊字門の漢語とその用字―その二訓読の語―」(『成城文芸』39/1965)

4 前田育徳会尊経閣文庫編『色葉字類抄』二卷本(尊経閣善本影印集成19/2000)八木書店

5 三宅ちぐさ編『天理大学附属天理図書館蔵 世俗字類抄 影印ならびに研究・索引』(翰林書房1998)

6 また、例えば三卷本に無い「自今以後」の語については、二色葉ではシ篇に位置するため音読語と教え表に計上しないが、二世俗ではイ篇に在るため訓読語(「17」の二世俗特有語と教える。よって「特有語」は、疊字部訓読語内でのみ通用する呼称ということになる。

7 二色葉と二世俗の重複語はカ篇「纏頭」の一語のみ。すなわち、他二本に無い特有語は、三色葉が三〇語、二色葉が一九語、二世俗が二五語となる。

8 注3・第二論文で、頻出の用字について述べられた部分があり、「可」「一哉」などはその類のものである(八四頁)。

9 「二卷本『世俗字類抄』の所収語彙―二卷本及び三卷本『色葉字類抄』との比較から―」(『岡大國文論稿』9/1981)

10 字類抄の系統関係に関する従来の説、また諸本の異同については、

小川知子氏の博士論文「字類抄諸本の系統的關係」(北海道大学2003)に詳し。

11 検索には『色葉字類抄漢字索引』(島田友啓編古字書索引叢刊1966-1970)を用い、『色葉字類抄 研究並びに索引』(中田祝夫・峰岸明編風間書房1964)の索引部分も参照した。

12 「参差(カタ、カヒナリ)」について、シ篇疊字部には「参差(シシ)」(「参差(シムシ)」の二例が在るが、音読語末尾に位置する「シシ」は別筆とし、計上しなかった。字体の差(「透」と「委」、「籠」と「籠」等)は無視し同語として教えたが、「容兒(カホハセ)」は「ヨウハウ」「オハラヒ」で掲出されているため、「容貌(ヨウメウ)」とは別語とした。「更衣(コロモカヘ)」と「更衣(カウイ)」には意味のズレがあるため、別語とした。

〔付記〕

本稿は、訓点語学会 第九十九回研究発表会(二〇〇八年一月一二日)の発表原稿の前半部分に、加筆修正を施したものである。また、先行研究等の表記に関して、旧字体を通行字体に改めたものがあることとお断りする。

(ふじもと あかり 大学院人文社会系研究科 博士課程三年)